

〔学術論文〕

『ボヴァリー夫人』における「青」の表象をめぐる一考察  
—エンマと男性たちの関係、風景、身体、道具立てに着目して—

The Study of the Image of “blue” on Madame Bovary

野田(水町) いおり

Iori (MIZUMACHI) NODA

**要旨：**本論文は、フランス19世紀の小説家ギュスターヴ・フロベールの『ボヴァリー夫人』を取り上げ、同作品における登場人物の心象世界が、テキストにおける「青」の描写によってどのように表現されているかを分析し、「青」の持つ役割と意味を解明することを目的としている。なお、本稿では、とくに、登場人物の身体表象、登場人物を取り巻く風景描写や道具立てにおける「青」に着目して考察を行った。

主人公であるエンマの心象世界における「青」は、夫のシャルルとの関係においては「嫌悪感」、愛人のロドルフやレオンとの関係においては「幸福感」と結びついており、『ボヴァリー夫人』における色彩描写の「青」は、単に色を表現するだけでなく、テキストの細部に配置され、登場人物の心理状態を表現するためのツールとなり、物語の展開に説得的かつ効果的な役割を果たしている。また、風景や道具立てに付与された「青」は、登場人物によって異なる意味を持つ。たとえば、エンマにとっては「自由」や「幸福」、ロドルフにとっては「規範」と「策略」、レオンにとっては「自由」と「規範」いう二律背反的（アンビバレント）な意味づけである。つまり、フロベールは、物語の展開をストーリーで描いただけでなく、登場人物たちの「青」に対する意味づけの相違によっても表現しているといえるのではないだろうか。

**キーワード：**『ボヴァリー夫人』、青、表象、風景描写、身体表象、道具立て

### はじめに

本論文では、フランス19世紀の作家ギュスターヴ・フロベール<sup>1</sup>の著書『ボヴァリー夫人』<sup>2</sup>を取り上げ、同作品の中で使われている青い色彩によって、登場人物の心象世界がどのように表現

---

\* *Madame Bovary* のテキストには、アルベール・チボーデ (Albert Thibaudet) とルネ・デュメニル (René Dumesnil) 編集によるプレイアッド版全集の第1巻を用い、引用はその頁のみを記す。(Oeuvres complètes de Gustave Flaubert, “Bibliothèque de la Pléiade”, Gallimard, 5 vols, 1983.) なお、テキストに記した下線は、筆者による強調である。

されているかを考察し、『ボヴァリー夫人』における「青」の持つ役割と意味を検討する。

『ボヴァリー夫人』は、結婚生活の単調さと夫の凡庸さに幻滅した主人公エンマ・ボヴァリーが、満たされない結婚生活の中でさまざまな苦悩や葛藤を経験し、淪落の恋に落ちていく物語である。エンマの苦しみはストーリーの中で語られており、一読すれば読者は容易にエンマの苦悩を知ることができる。しかしながら、「フロベールの作品は、ストーリーそのものよりも、細部の描写によって成立している」<sup>3</sup>とも評されている。それならば、物語の内容からだけでなく、テキストの細部に描かれた表象からもエンマの心象世界を見ることが可能なのではないか。そこで、本稿では、『ボヴァリー夫人』における表象の中でも、「青」という色に着目してみたい。

まず、筆者が、テキスト分析の中でも「色」を取り上げたのは、文学作品における色彩描写が重要な役割を任っていると考えられるからである。読者は視覚を通して登場人物の感情を知り、色は登場人物の心象世界と一体化して生き活きとした情景を生み出す<sup>4</sup>。とくに、人間の営みを写実主義的に詳細に記そうと試みた『ボヴァリー夫人』という作品において、色彩描写はその根源的な機能を担っており、色と登場人物の心象世界を考察するうえで、『ボヴァリー夫人』は格好の題材である。次に、筆者が、とくに「青」という色を取り上げたのは、『ボヴァリー夫人』における「青」が、物語の展開、登場人物の心象世界の描写において、重要な役割を担っていると推察したからである。たとえば、エンマが関係を結んだ男たちと最初に出会った時の服の色、エンマの身体描写、初めて不倫をした時の風景描写、愛人と駆け落ちする時に使用した馬車の色、エンマを破産と自殺に追い込んだ贅沢な浪費物に付与された色、エンマが自らの命を絶つ時に使用した毒薬の瓶の色など、小説の展開において、重要な意味を持つ道具立て（小道具）、風景描写、登場人物の身体描写の多くが「青」で表現されているのである。

現在まで、『ボヴァリー夫人』の研究において、色の表象に着目したものはいくつかある。たとえば、ウェナー・ラムッセン（Wehner Rasmussen）は、『ボヴァリー夫人』における「青白い」（pale）という形容詞のパターンを分析し、「青白い」という表現には、肯定と否定の両面があることを指摘している。また、高井奈緒は「フロベールの小説における女性の肌の色に関する考察『ボヴァリー夫人』、『感情教育』、『サランボー』の場合」において、フロベールの3つの著作の中で描かれた女性の肌の色と社会背景の考察を行っている。しかし、両者の考察の対象となった「青白さ」が、『ボヴァリー夫人』の作中でどのような意味や役割を持って使用されたかについてのテキスト分析には、さらなる研究の余地がある。

その中で、フィリップ・ダンカン（Phillip. A. Duncan）は、『19世紀フランス研究』（*Nine-*

1 Gustave Flaubert (1821-1880) 以後、フロベールと記載する。

2 原題Madame Bovary 1856年に雑誌に掲載され、1857年に出版された。

3 大橋理恵著「フロベールの書簡—作品への転換—」『大分芸術文化短期大学研究紀要』33巻、1995年、p.163。

4 伊原昭著『色へのことばをのこしたい』、笠間書院、2011年、p. 9。

*teenth-Century French Studies*, 1985) の中で、『ボヴァリー夫人』における「緑」と「誘惑」の関係について分析し、テキストにおける「緑」の役割と意味を考察する興味深い論文を発表した。しかしながら、『ボヴァリー夫人』における「青」の役割に関しては、同じような研究がまだなされていない。

そこで、本稿では、登場人物の心象世界と「青」の関係を分析し、さらに、「青」の持つ意味と役割について考察を行い、フロベールが「青」の中に何を表現しようとしたのかを明らかにしたい。その際、ミシェル・パストゥロー (Michel Pastoureaux) の『青の歴史』(*Bleu. Histoire d'une couleur*) (松村恵理、松村剛訳、筑摩書房、2007年) を補完的に用いながら、『ボヴァリー夫人』における「青」の役割と意味について言及する。第1章では、風景描写、道具立て、身体表象に着目して、シャルルと「青」の関係について考察する。次に、第2章では、エンマと1人の不倫相手であるロドルフの間に見られる「青」のイメージの相違を明らかにする。最後に、第3章では、2人目の不倫相手のレオンとの関係における「青」のイメージが、恋愛の初期と、エンマが支配者となり、性役割 (ジェンダー) が変化した恋愛後期ではどのように異なるのかについて見ていきたい。

なお、本稿では、コーパスを用い、『ボヴァリー夫人』のテキストに記された「青」(bleu)、「青みがかった」(bleuâtre)、「青くする、青くなる」(bleuir)、「青ざめる・青くなる」(pâlir) を抜き出し分析を試みる。本論文では、日本語として訳出する際、pâlirは「青白い」、bleuirは「青くなる」と区別して記載することにした。

## 第1章 シャルルと青の世界

フロベールは、シャルルに「善良かつ凡庸」という特性を付与している。『ボヴァリー夫人』においては、シャルルの平凡さがエンマを苦しめることになったのであるが、このようなシャルルの性質を描き出す際、フロベールは「青」という色をどのように利用して物語の展開に役立てたのだろうか。第1章では、シャルルの視緑がとらえた重層的な色彩描写に「青」、さらには道具立てに付与された「青」について分析し、シャルルとの関係における「青」の役割と意味について考察する。

### 1、色彩描写の重層性にみられる「青」

シャルルはエンマに属する特性の中でも、最も特徴的と言われている目を間近に見て、以下のように描写している。

彼女の中で一番美しいもの。それは目だ。茶褐色なのだが、まつ毛のせいで黒く見えた。まなざしは、無邪気な大胆さで、まっすぐに見据える目であった。(p. 27)

こんなに近くで見ると、妻の目は、瞬きをする時などはとりわけ大きく見える。影になると黒っぽく、明るいところでは濃い青色に、次々に色の層になって、奥の方はあくまでも濃く、エナメルのような表面に近付くにつれて、色は薄くなっている。(p. 45)

引用が示すようにエンマの無邪気な視線は子どものようでもあり、男をじっと見据える目は女性としての規範やマナーを逸脱し<sup>5</sup>、エロ的なものと結びつく可能性を内包している<sup>6</sup>。つまり、エンマは無邪気な子どもらしさと挑発的な大人の女性の視線の両方を持ち合わせていることが分かる。また、「影になると黒っぽく、明るいところでは濃い青色に、次々に色の層になっている」と描写されているように、本来、エンマの目の色は茶褐色であるのに、シャルルには黒や青に見えるため、シャルルはエンマの目の色を特定することができていない。子どものようなあどけなさや大人のエロティックな視線を同時に持ち、シャルルによって本来の色とは異なる色彩の重層性で描写されるエンマの目は、両義性と多面性を持っている。感受性の乏しいシャルルは、そのようなエンマの目の実体をとらえることができない。目の描写とおなじように、他にも色彩描写の重層性で描写されている個所がある。川の流れを示す描写である。

彼（シャルル）は、よく窓を開いて肘をついた。ルアンのこの界隈を、醜悪な小ヴェニスのように見せている川が、黄色、紫、または青に染まって、橋や鉄柵の間を流れていた。(p. 22)

シャルルは、学生の頃、ルアンに暮らしていた。そこを流れる川は、ルアンの街の風景を美しい水の都ヴェニスへと変化させずに、「ignoble」（＝汚らしい、醜悪な）な小ヴェニスに変えてしまった。つまり、ルアンを汚い小ヴェニスのように見せている川は「贋物」を生み出すツールとも考えられる。さらに、その川の色は、本来、無色透明であるはずなのに、黄色や紫や青などの色彩を与えられ定まった色をしていない。

先の引用で述べた通り、シャルルによって知覚されたエンマの目も現実の色とは異なる色彩の重層性で描かれていた。先ほどの川の描写も同様で、本来の色とは異なるさまざまな色彩が付与されている。目の色の移り変わりや川の色々の重層性に見られる共通色は、まさに「青」である。この二つの共通点として、シャルルが対象の本来の姿を把握せず、対象を自分の見たいように見ていることがあげられる。偽物を作り出す川、本物とは異なる目の色、移ろう色彩。シャルルにとっての「青」は、実態のない贋物を描写する時に使用される色であり、実態のない不確かな印象を読者に与えていると同時に、シャルルの心象世界における揺らぎや曖昧さを感じさせている。

5 小山美沙子著『7月王政下のある女性用百科事典』（日仏教育学会第3号、1997年）に、当時の女性に求められたマナーやエチケットについての詳しい記載がある。

6 工藤庸子著『フランス恋愛小説論』（岩波書店、1998年、p. 21）に、「見ることは、対象に対する具体的な情報を集めるだけでなく、もっとエロ的なものに関わっている」との指摘がある。

## 2、エンマの身体描写と「青」の関係

次は、シャルルがエンマの身体をどのようにとらえ、それが「青」とどのように関連するのかについて見ていくことにする。

ある日、彼（シャルル）は3時頃に（エンマの家を）訪ねてきた。みんな畑仕事に出ていた。彼は炊事場に入っていったが、はじめはエンマのいるのが目につかなかった。（中略）煙突からさしこむ日の光が、暖炉の蓋の煤をピロードのように見せ、冷たい灰を青く照らしていた。すると、エンマが窓と暖炉の間で裁縫をしていた。あらわな肩の上に、細かい汗のしずくが見えた。（pp. 33-34）

最初、エンマはシャルルの目にとまらない。しばらくして、煙突からさしこむ薄暗い光に青く照らされた灰を背景に、シャルルは裁縫をするエンマを発見する。裁縫は当時（現在も）、女の仕事とみなされていた。シャルルは青の光に照らし出され、生命を失った静物（nature morte：死んだ自然）としての灰を背景にして初めて、女性の役割を担い、裁縫をするエンマの姿を見いだしている。このことは、裁縫をするエンマが本来の姿ではないことを暗示し、本来の自然の姿ではないエンマは「漠然とした曖昧な青」というイメージでとらえられるのではないだろうか。

この「曖昧な青」に関しては、ミシェル・パストゥローの『青の歴史』によると、青はロマン主義の代表的な色であり、ロマン主義運動の終焉後も、灰色がかった青は憂鬱と悲嘆の色であったという<sup>7</sup>。さらに、シャルルとエンマが初めて出会った時のエンマの服は「裾に三段のひだの付いた青いメリノ服（robe de mérinos bleu）」と描写されている。テキストには bleu（＝青）の表記しかないが、再度パストゥローによると、当時、青の染色は難しく、布の繊維に上手く浸透しない上、洗濯と日光双方の作用ですぐに色あせてしまう。高級で良質な素材とされるメリノ生地を染色した場合でも、明るい青というよりは、くすんで灰色がかった見えたという<sup>8</sup>。おそらく、エンマの青のメリノ服もくすんだ色をしていたのではないか。

つまり、シャルルがエンマをとらえた時の背景色が、灰色がかった青であったこと、エンマとシャルルの最初の出会の際の服が（おそらく）灰色がかった青色であったことは、エンマがシャルルと結婚した後、絶え間ない憂鬱と大きな落胆を感じることの伏線となっているのである。

## 3、道具立てとしての「青」の持つ意味

次は、シャルルとテキストに記された「青」色の道具立て（小道具）について見ていきたい。

7 ミシェル・パストゥロー（Michel Pastoureau）著 松村恵理、松村剛訳『青の歴史』、筑摩書房、2007年、見開きの1ページの「ヴェルテルの燕尾服」の紹介文からの引用。

8 前掲書、p.148。

シャルルとエンマが出会ったきっかけは、エンマの父親であるルオーじいさんが骨折をし、シャルルに往診の依頼が入ったことである。その依頼の手紙は青い封筒に入っていた。そして、シャルルがルオーじいさんの農場に行くと、青いメリノ服を着たエンマがシャルルを出迎える。これが二人の最初の出会である。青い封筒と青い服。出会いの道具立てとして、「青」は印象的なイメージを持って読者の脳裏に刻まれる。しかし、それ以外にも、『ボヴァリー夫人』には、ストーリーの展開に重要な役割を果たす小道具が多く見られる。シャルルに属する小道具として、「帽子」「フロックコート」などはとくに有名で、多くの研究対象となってきたが<sup>9</sup>、ここではシャルルの「靴下」に着目してみたい。以下は、物語の冒頭部分、入学初日のシャルルが登場する場面である。

(シャルルは) スポン吊りで、きつく吊り上げた淡黄色のスポンから、青靴下をはいた脚が覗いている。磨きの悪い、鋌打ちの頑丈な靴を履いていた。(p. 15)

いかにも頑丈そうな厚底の靴と青色の靴下が印象的であるが、これらは何を意味するのか。その問いに答えるため、テキストに記された他の青靴下や厚底の靴の描写を見てみよう。

田舎の女たちが長い列を組んでやってきた。青い靴下に平靴を履き、その傍を通ると牛乳の香りがした。(p. 148)

おずおずと一人の老婆が進み出た。足には頑丈な板底の靴をはき、腰の周りには大きな青い前掛けをかけている。(p. 161)

引用に示された厚底の靴や青い靴下は、「田舎」「農業」「武骨さ」を想起させる小道具であろう。エンマは田舎を彷彿とさせるもの全てを忌み嫌っていた。一つ目の引用の牛乳の香り<sup>10</sup>は、農家の暮らしが身体に染みついて離れないことを表している。シャルルと「青」道具立ての関係は、田舎、農業、武骨さなどが結びついており、その結果、シャルルに対する嫌悪感というエンマの心象世界を形成している。

ここまで、シャルルとの関係における「青」の役割と意味を解明するため、色彩の重層性、

9 アルベール・チボーデ (Albert Thibaudet 1874-1936) は、フランスの高名な文芸批評家である。チボーデは、著作『ギュスターヴ・フローベール』(戸田吉信訳、法政大学出版局、2001年)の中で『ボヴァリー夫人』における登場人物の細かな分析を行っており、その中で、シャルルの「帽子」や「フロックコート」の分析がなされている。登場人物の考察に関しては、「チボーデの論文を頂点としている」と考えるのが一般的である。

10 トニー・タナーは『姦通の文学』(高橋和久、御興哲也訳、朝日出版、1986年)の中で、Bovaryの性は、Bouveau (去勢された牛)、Bouverie (乳牛舎)の二つの可能性があるとし唆している。この説に従うならば、エンマにとって、牛乳の香りはシャルルを想起させ、より一層、嫌悪感をつのらせるものであったにちがいない。

身体描写、道具立てに着目してテキストを分析してきた。川の流れやエンマの目は、本来の色とは違う色の重層性で表現されており、そこに共通して登場する「青」の色は、実態のない様子を表現している。シャルルが、(無機物である) 灰を青く照らした光の中にしかエンマを見つけれなかったことは、シャルルがエンマの本当の姿を見いだせないことの表れである。また、シャルルが最初の登場の時に履いていた靴下の青は、洗練されていない無骨な田舎の表象である。エンマは田舎や自然をひどく嫌っていたため、田舎を象徴する青靴下をはいたシャルルがエンマから愛されるはずもなく、このころは、シャルルの最初の登場の時から計画されていたのであろう。

いずれにせよ、シャルルの「青」は、曖昧さ、不確かさ、偽物、武骨さ、嫌悪感などと結び付き、つかみどころのない漠然とした青の世界を形成している。つまり、シャルルの「青」の世界には、マイナスの意味と役割が与えられているのである。

## 第2章 ロドルフとの関係においてみられる「青」

第2章では、エンマの最初の愛人であるロドルフとの関係における「青」の役割と意味について、『ボヴァリー夫人』の時代背景である七月王政期の社会規範も考慮に入れて考察を行いたい。

### 1、エンマの身体描写における青い色と社会規範

まずは、ロドルフがとらえたエンマの身体描写と「青」の関係について見ていくことにしよう。以下は、ロドルフがエンマを初めて見た時の印象である。

あの女はこちらの心の奥まで錐のように入ってくる目をしている。それにあの青白い色！おれは青白い肌の女が大好きだ！（p. 143）

エンマが、シャルルに対し「ぐっと見据える目」をしていたように、「錐のように心の奥まで入ってくる目」という表現は、当時、見られる客体でしかなかった女が、見る主体に変わっていることを表している<sup>11</sup>。しかしながら、何よりもロドルフの興味を引き、「大好きだ！」とさえ思わせしたのはエンマの青白い肌である。七月王政期には、青白い肌は結核などの病気と結びつき、儂げで頼りない女性の象徴でもあった<sup>12</sup>。結核に蝕まれ、青ざめた女性たちの肌は死を想起させ、ロマン主義的で刹那的な感傷を喚起し、男性たちの興味をひいた。「女性＝脆弱」という文化的な刷り込みがなされ、「弱い女は男性の庇護を受けることで幸せになれる」といった価値観が形成された。このような価値観が男性優位社会を生み出し、その結果、女性の社会

11 小倉孝誠著『<女らしさ>はどう作られたのか』（法蔵館、1999年）に「見られる客体」としてのエンマの分析がなされている。

12 女性の身体と病気・衛生との関係については、アラン・コルバン著 小倉孝誠監訳『身体の歴史Ⅱ』、藤原書店、2010年に詳しい記載がある。

的地位は排除され、女性たちは自分の居場所を家庭に限定されるようになっていった。このような社会的な拘束の影響は、とくに中産階級の女性たちに向けられ、中産階級の女性たちは、夫を支え、信心深く、清楚で、教養のある妻になるよう求められていた<sup>13</sup>。

そのように考えると、遊び人のロドルフがエンマの青白い肌に目をつけたのは、「中産階級の人妻」というステレオタイプに惹かれたからではないか。規範の範疇に留まっていればこそ、ロドルフはエンマを愛した。ところが、エンマは、その規範を逸脱し、自由になることを望む。エンマが、家庭も夫も捨てて駆け落ちをしようと提案すると、エンマにステレオタイプのな中産階級の女性像を望んだロドルフの愛は一気に冷めてしまう。ロドルフは、自分が本当に愛されていると知ると、エンマを人妻としての枠組みの中でしか愛していなかったため、もはやエンマに愛情を感じられなくなってしまった。つまり、ロドルフがエンマの身体を知覚する時の「青」は、男の庇護を必要とする病気がちで脆弱な人妻という、七月王政期の保守的で男性優位の社会通念をイメージしているのである。

## 2、風景描写の「青」に見られるエンマの恋の喜び

次にロドルフとの関係において、「青」がどのようなエンマの心象風景を形成しているかについてみていきたい。以下は、ロドルフがエンマを誘惑した時のセリフである。

エンマ 「でも、世間の考え通りにし、世間の道徳に従っていかねばなりません」

ロドルフ 「私たちをとりまくちっぽけな道徳、なれ合いの道徳、人間の道徳、(中略)地べたに低く蠢いている道徳。しかし、一方でもう1つの道徳、永遠の道徳があたり一面にあるのです。高い所にあるのです。ちょうど私たちを取り巻く景色のように。私たちを照らす青空のように」(p. 156)

引用のように不貞を働くことを逡巡し、世間の道徳を守ろうとするエンマとは異なり、ロドルフは社会が求める道徳を否定し、魂の信じる方向へ向かう自由な道徳観こそが永遠のものであり、自分たちを照らす青い空のようだ (le ciel bleu qui nous éclair) と述べている。つまり、ロドルフは、規範にとらわれない自由な道徳観を「青」で表現しているのである。さらに、青の描写は続く。次の引用は、ロドルフとエンマが最初の逢引きをし、森の奥に歩き入る時の描写である。

ロドルフは手綱をゆるめた。2人はくつわをならべていっせいに駆け出した。やがて頂上につくと馬はびたりと停まった。エンマの青い大きなヴェールが垂れ落ちた。(中略)10月のはじめであった。野面には霧が立ち込めていた。

13 アラン・ドゥコー著 山方達雄訳『フランス女性の歴史4』(大修館書店、1981年)に保守的で規範性の強い、男性優位社会における女性たちの姿が記されている。

ヴェールは日よけの目的だけでなく、宗教的には悪魔から身を守るために使われていたという<sup>14</sup>。したがって、エンマの大きなヴェールは、「青」という色を付与されたことで、規範にとられない自由な道徳観を示す一方で、不道徳な行為から身を守る意味もあったと推察できる。また、エンマの周りには靄が立ち込め、ロドルフの言う「青い空」のようにではない、かすんだ空気がエンマを取り囲み、道ならぬ恋に身を投じることをためらうエンマの気持ちを体現しているかのようである。規範に沿うのか、自由な感情に身を委ねるのか。エンマの揺れ動く感情は、ヴェールの青とくぐもった靄で表現されている。しかし、とうとうエンマは不倫の恋を選択し、秘密の恋に落ちていく。その時の「青」は次のように記されている。

(馬に乗って森を走っている時) ロドルフは、木の枝を除こうと女に寄り添った。エンマは男の膝が自分の足に触れるのを感じた。空は青になった。(p. 170)

私には恋人がある！恋人が！」エンマは繰り返していた。(中略) 今まで諦めていた恋の喜び、あの熱っぽい幸福をいよいよ我がものにしようとするのだ。自分はある不可思議な世界に入ろうとしている。そこでは、全てが情熱であり、恍惚であり、狂気なのだ。ほのかに広々とした青い世界が彼女を取り巻いている。(p. 173)

関係に親密さが増すとともに青い靄が消え、やがて空が青になった (Le ciel devenu bleu.)。そして、とうとう道ならぬ恋に足を踏み入れた後には、エンマの心に美しい青い世界が広がっている。主人公の心象世界と風景描写の色彩が一致し、巧みにストーリーを織りなしている。ロドルフとの関係における風景描写の「青」は自由や幸福をイメージさせる。エンマにとっては、不満足な現実を忘れさせ、社会規範にとられない恋のイメージが「青」なのである。

### 3、道具立ての「青」にみられるエンマの自由への欲求

次に、ロドルフの関係において道具立ての「青」が、エンマにとってどのような意味を持つのかについて見ていこう。エンマは苦悩に満ちた結婚生活から自由になること願ひ、ロドルフに駆け落ちを提案する。しかし、ロドルフはエンマに口先だけの約束をして、結局、エンマを捨てて姿をくらましてしまう。以下は、ロドルフが駆け落ちの場には来ないことを手紙に書いてエンマに届け、それを読んだ時のエンマを描写したものである。

青空は彼女(エンマ)のうちに沁み入り、風はうつろな頭の中を駆け巡った。(p. 215)

先にも述べたように、エンマにとって「青」は自由で幸せな心象風景を表している。青空で

14 ブランシュ・ペイン著 古賀敬子訳『ファッションの歴史』、八坂書房、2006年。

表された恋の世界がエンマの身体のおちこちに刻まれ、痕跡を残しているものの、頭の中では空虚な風が駆け巡り、エンマの幸せを拭き去っていく。そして、倒れたエンマに追い打ちをかけるように、次のような描写が続く。

その時、広場を青いチルビュリー馬車が通り過ぎる音が聞こえた。エンマはアッと叫んで、仰向けさまにバツリと倒れた。(p. 216)

この青いチルビュリー馬車は、エンマとロドルフが駆け落ちするときに使う馬車であり、エンマが自由になるためのツールであった。その馬車に「青」の色が与えられたことは、エンマにとっての「青」が、規範からの逸脱、あるいは自由を意味していると考えて良いだろう。エンマの心象構造は、「恋をすることで、自らの精神が解放された時にこそ幸せを感じられる」ものである。フロベールは、そのようなエンマの心象世界に、「青」という色を与えている。繰り返しになるが、青い空、青い恋の世界、青い馬車に見られるように、規範から解放された自由で幸せなエンマの心象風景が「青」で表現されているのである。

さて、ここまで、ロドルフとの関係において、「青」が、エンマの心象世界にどのような意味を付与し、どのような役割を果たしたのかについて分析してきた。「青」は、エンマにとって不満足な現実を忘れさせ、社会規範にとらわれない恋のイメージ、自由や幸福感を意味している。しかし、ロドルフにとっての「青」は、エンマと同じ意味を持っていない。たしかに、ロドルフはエンマに初めて出会った時、エンマの身体に「青」のイメージを持った。しかし、それは「青白さ＝脆弱さ」であり、ロドルフはエンマに対し、ステレオタイプ的な女性像を求めたのである。

しかし、一方で、ロドルフはエンマに対し、規範から外れるようにそそのかし、説得し、風景描写の「青」示すように自由な道徳観に「青」の色を与えてもいる。しかしながら、自由な道徳観に「青」を付与したロドルフの発言内容と、ステレオタイプの「青白い女」に惹かれるロドルフの心象世界には一致が見られない。つまり、ロドルフの「青」の心象世界の不一致が示すように、エンマを誘惑する時のロドルフの発言は、まったくの虚構なのである。ロドルフが「よし、あれ（エンマ）を俺のものにしてやろう<sup>15</sup>」と画策してエンマを誘惑する時の、まさにそのきっかけとなった農業共進会の入場切符の色は青であった。したがって、ロドルフにとっての「青」は、エンマを「中産階級の人妻」という型にはめ、エンマを誘惑する時のツールにすぎないのであり、「青」が自由や恋の喜びという意味付けを持つエンマの心象世界とは、大きく異なっている。

---

15 Flaubert, *Madame Bovary*, p. 142.

### 第3章 レオンと「青」の世界

第3章では、エンマの二人目の愛人であるレオンと「青」の世界を取り上げる。レオンとエンマの関係において、特筆すべきは、エンマが「男性化」<sup>16</sup>し、支配する主体となっていることである。このような二人の関係性は、「青」の表象の中でどのように描かれているのだろうか。本章では、自由の表象としての「青」と、両義的価値を持った「青」について見ていきたい。

#### 1、レオンとエンマにみられる自由の表象としての「青」

次の引用は、レオンがエンマを誘惑し、不倫をそそのかす場面の描写である。

レオン 「貴方ともっと早く出会っていて、互いにしっかり結び付いたらどんなに幸福だっただろうと考えると絶望を感じています」

エンマ 「私も時々そんなことを考えました」

レオン 「夢ですね」

そして、レオンは、彼女の長い白帯の青い縁取りをそっといじりながら付け加えた。

「はじめから出直せばいいではありませんか…」(p. 246)

レオンがエンマの白い帯の中でも、とくに青の縁取りをいじって不倫をそそのかすのは、第2章で述べたように、「青」がエンマの幸せを体現し、精神の自由や自己解放を表している色だからであり、不倫がエンマの心の満足をもたらすことを表している。不倫の恋がどれほどエンマにとって幸せなものか。次の引用はレオンから愛を告白された時のエンマの描写である。

彼女（エンマ）の顔は、風がサッと雲を吹き払う時のあの空のようであった。暗く垂れこめていた哀愁の雲が青い目から消え失せたように思われた。顔じゅう輝いていた。(p. 244)

エンマにとって、シャルルとの満たされない結婚生活を一時的にでも救ってくれるのは、恋をしている時である。シャルルだけが知覚したエンマの（偽物の）青い目には、結婚生活に対する不満やシャルルへの嫌悪感によって哀愁の雲がかかっていた。しかし、レオンの愛の告白により、憂いの雲は吹き払われ、エンマの顔は輝きを取り戻している。幸せな「青」のイメージは、次の描写にも見られる。これは、レオンと逢引きをした教会の描写である。

灰色の石で造られた教会の上を、鳥の群れが青空にクローバー型のアーチを作り、小さな鐘楼のまわりを舞っていた。(p. 248)

---

16 「男性化」とは、女であるエンマが男のように振る舞うことであり、男を想起させる身体描写、言動も「男性化」と定義した。エンマの「男性化」には、「自己解放」と「自己否定」という二面性があり、エンマの「男性化」は、『ボヴァリー夫人』の時代背景である七月王政期のジェンダー的諸問題を内包する可能性がある。拙稿『『ボヴァリー夫人』を巡る一考察－「男性化」するエンマに焦点をあてて』（『人間文化研究』14号、2011年、p. 37 - p. 53）を参照されたい。

かつて、プラトニックな恋愛に終わったレオンと偶然の再会をはたし、逢引きの場所である教会に向かうエンマの心は高揚している。そのようなエンマの心は、青空で表され、その空には鳥の群れが幸せの象徴であるクローバー型のアーチを描いている。青い空はレオンと愛し合うようになった後の風景描写にも見られる。

彼ら（エンマとレオン）が木立や青空や芝生を見て、流れる水の音、葉蔭にそよぐ風の音を聞くのは、これが初めてではなかったが、それらの全てを心から賛美したことはなかった。(p. 265)

先にも書いたように、エンマにとって「青」が風景描写や道具立てに描かれる時は、恋をしていて幸せな状態である。これはレオンにとっても同様で、「青」は規範から自由になったエンマとレオンの自由な精神や、恋をする幸福感を体現する色となっている。ところが、エンマとレオンの関係は徐々に変わってくる。恋愛の初期の頃は、二人とも恋をする喜びで満たされるのであるが、その後、エンマは「男性化」し、レオンを精神的にも肉体的にも支配しようとする。次は、そのようなレオンの心象世界が、どのような「青」で表現されるのかについて見ていきたい。

## 2、レオンの「青」に対する両義的（アンビバレント）な価値づけ

レオンは、エンマに夢中だった。エンマは「レディー」であり、人妻であり、本当の愛人だと思っていた。レオンはエンマのスカートのレースの下を賛美し、かつて、これほどまでに素晴らしい女性には出会ったことがないと考えている。その時のレオンの様子は、以下のように描写されている。

エンマは封建時代の城主の奥方のように胴がすらりと長かった。また、「バルセロナの青白い女」にも似ていた。が、わけてもエンマは天使であった。(p. 273)

「バルセロナの青白い女」という絵画をテキストに引用することで、文字を視覚化し、エンマの青白いイメージを強調している<sup>17</sup>。細身の身体、青白い肌、城主の奥方のようなたち振る舞いは、まさにロマン主義的な懐古趣味であり、レオンは、エンマの持つ「ステレオタイプの中産階級の女」という側面を愛したのである。また、「エンマが天使であった」という一文は興味深い。当時は、angel in the house「家庭の天使」という言葉がもてはやされ、とくに中産階級の女性たちは、母性を強調され、家庭に属することが求められた。女性たちは、欲求と実質的な身体を持たない「天使」の役割を担い、女性の自然的性質と欲求は宗教としつけに

17 文学における絵画の引用の効果についての本稿の記載は、大阪府立大学女性学研究所主催、女性学コロキウム「文学とジェンダー フランス文学と絵画」（2012年2月4日）における村田京子センター長、同大学教授の発表に着想を得たものである。

よって規範化され、純粹、敬虔、従順といった特性を持った「真の女性」(true womanhood)へと成長することが社会から求められていた<sup>18</sup>。引用のように、レオンは、エンマの青白さに加え、「天使」としての側面にも惹かれており、エンマに対するレオンの欲求は、規範から逸脱し自由な恋をすることと同時に、規範に範疇に留まるという両義的(アンビバレント)な意味を持っていたと言えるだろう。

ところが、恋愛が進むにつれて、「エンマがレオンの情婦というよりもむしろ、レオンがエンマの情婦であった<sup>19</sup>」という引用が示すように、エンマは、レオンに対して「男性化」し、ルイ13世のように顎鬚をはやすこと、黒い服を着ること、自分と同じカーテンを使用することなどをあれこれ指図するようになる。エンマは、もはや欲求を持たない「天使」ではなくなった。逢引きはエンマが決定し、淫蕩、大胆になり、男のように煙草を吸うようになった。その時のエンマの様子は、次のように記されている。

エンマは荒々しく着物を脱ぎ、コルセットの細紐を引き抜いた。(中略)それからまとっているものを一度にかなぐり捨て、青ざめて、言葉もなく、興奮にふるえて、レオンの胸にとびかかった。(p. 289)

たしかにレオンは、恋愛の初期の頃は、エンマと同じように恋に幸福感や喜びを見いだしていた。「青」で描かれた風景描写には、社会通念に縛られない二人の幸せで自由な意志が見られる。しかし、恋愛が進行し「男性化」したエンマを前にすると、「レオンは自分の個性が日ごとに強く吸収されていくことに憤りを感じ<sup>20</sup>」、また、「以前は魅力的に感じた事柄が、今は、空恐ろしくなってきた<sup>21</sup>」とさえ思うようになってくる。「男性化」した後のエンマの「青白さ」は、もはや幸せを表す色ではなく、レオンに窮屈さと恐怖さえ与えるものに変化してしまったのである。

一方で、エンマも、内在化した自己の本来の自然的欲求である女性性(セックス)と、修正された人工的な性質、すなわち社会的に与えられた役割(ジェンダー)というアンビバレントな価値観の間で揺れ動き、葛藤していた。「家庭の良き妻」という規範に留まるのか、自由な恋の世界に身を委ねるのか。結果として、エンマは、自分の心に従うことを選び、淪落の恋に落ちていったのだが、当時の社会では、「天使」である女が欲求を持つことは、タブーとされていた。しかし、自然な性を選択したエンマは女にも欲求があることを隠そうとしない。レオンを愛するがゆえに、自らの道徳心と社会通念を捨てたエンマが、社会規範も性規範をも逸脱

18 この記載は、大阪府立大学女性学研究センター主催、日韓シンポジウム(2011年12月18日)において、イ・ギョソラン梨花女子大学教授の発表の一部をまとめたものである。

19 *Ibid.*, p. 285.

20 *Ibid.*, p. 289.

21 *Ibid.*, p. 289

した時、レオンの心が離れていくというストーリーは、あまりにもイロニックである。

ここまで、レオンとの関係における「青」の意味を探ってきた。エンマと同様に、レオンにとっても「青」は自由な恋心を表すものであり、幸せを意味する色である。二人が「青」に幸せの価値づけを与えている時、二人の恋の世界はまるでユートピアのように描かれている。

ところが、レオンの持つ「青」のイメージには「恋の喜び」、「精神の自由」のほかに、ステレオタイプの規範化された「理想の女性像」という側面もあった。つまり、レオンは、「自由」と「規範」という矛盾した両義性を、「青」の表象の中に見いだしていたのである。

エンマが規範を逸脱し、自由意志によって行動し始めると、レオンの恋は徐々に冷めていき、「青」の持つ意味も「幸福感」から「窮屈さ」や「憤り」に変わってくる。エンマの一途な恋の「青」の世界は、両義性を持つレオンの心象構造の中に一度は組み込まれたものの、同一化することができなかった。フロベールは、二人の恋が終焉を迎えることを単にストーリーで描いただけでなく、二人の「青」のイメージのすれ違いによっても表現しているのではないだろうか。

## おわりに

本稿では、『ボヴァリー夫人』の登場人物の心象世界が、青い色彩によってどのように表現されているかを解明するため、登場人物の心象世界と「青」の関係、「青」の持つ役割と意味について分析を行ってきた。

第1章では、シャルルと「青」の関係について考察した。シャルルの「青」の世界は、実際の色とは異なった色彩の重層性が示す曖昧さや不確かさと、田舎や農業と結びついた嫌悪感に分けられる。シャルルの「青」の心象世界は、エンマにとっては、曖昧で居心地の悪い世界である。フロベールは、『ボヴァリー夫人』の登場人物の中で、ほとんど唯一と言ってもよい「善良なる人物」であるシャルルが、皮肉にもエンマの不幸の根源であるというストーリーを補完するため、シャルルの「青」の世界にマイナスの価値づけを与えたと考えられる。

次に、第2章では、エンマとロドルフの間に見られる「青」のイメージの一致と相違を明らかにした。エンマにとって、社会規範にとらわれない自由な恋愛や幸福感は「青」で表される。しかし、ロドルフにとっての「青」の役割は、エンマを中産階級の人妻という型にはめ、エンマを誘惑する時のツールにすぎない。両者のとらえる「青」の意味が異なることは、二人の恋が同じ方向を向いていないことの表れであり、二人の恋は成就するはずもない。二人の「青」のイメージの相違が生み出す二人の心のすれ違いは、ストーリーだけで物語を読んでしまう読者に対し、フロベールが仕組んだ暗黙のストラテジーのようにも感じられる。

最後に、第3章では、レオンの持つ「青」のイメージの解明を試みた。エンマの「青」が一貫

して「自由」のイメージで語られたのに対し、レオンは、「青」という色彩に「自由」と「規範」の相反する両義性を付与していた。レオンにとって、エンマが社会規範に反した「自由な恋愛の対象」であり、天使のような「理想の女性」でもあったからであろう。レオンの両義的な価値づけは、恋愛の進行とともに二人の「青」のイメージにすれ違いを生じさせる。結果的に二人の恋は破たんするが、フロベールは、二人の恋の終わりを単にストーリーで描いただけでなく、両者の「青」のイメージの相違によっても表現している。

本稿の目的である「青」の役割と意味についての分析をまとめると、以下のようである。まず、「青」の役割については、色彩描写の「青」は、単に色を表現するだけでなく、風景描写、身体表象、道具立てなどテキストの細部に配置され、登場人物の心理状態を表現するためのツールとなり、物語の展開に説得的かつ効果的な役割を果たしている。具体的には、エンマの「青」の世界は、シャルルとの関係においては「嫌悪感」、ロドルフやレオンとの関係においては「幸福感」と結びつき、『ボヴァリー夫人』のストーリーの発展にとって、重要な役割を担っているのである。

次に、「青」の意味に関しては、「青」は、それぞれの登場人物によって、異なった意味を持つことが分かった。たとえば、エンマにとっては「自由」や「幸福」、ロドルフにとっては「規範」と「策略」、レオンにとっては「自由」と「規範」いう二律背反的な（アンビバレント）な意味づけである。フロベールは、物語の展開を単なるストーリーで描いただけでなく、登場人物の「青」に対する意味づけの相違によっても表現しているのである。

『ボヴァリー夫人』は、エンマという一人の女性が、自由に生きたいと願い、奔走し、失敗する物語である。エンマが自由な意志で規範から逸脱すると、恋人の愛情が失われ、不幸になり、最終的には死に追いやられるというストーリーは、保守的で、規範性の強い、男性優位社会における女性の自由の限界を示すものである。また、本稿では取り上げなかったが、エンマは青い瓶に入った毒薬を飲んで自殺し、自殺を否認するカトリック的な宗教規範も冒してしまった。社会規範、性規範、宗教規範からも逸脱したエンマは、もはや現実社会に居場所はない。エンマは「青」の瓶の毒薬を使って、全ての規範から逃れ自由になろうとしたのだろうか。

本稿では、「青」の持つ役割と意味の考察に留めたが、エンマの持つ「青」のイメージと当時の社会規範やジェンダー構造には、着目すべき関係性があるのではないか。テキストにちりばめられた「青」以外の表象にも、何らかの意味があるのかもしれない。したがって、『ボヴァリー夫人』に描かれた表象とジェンダーの考察に関しては、筆者の今後の課題とし、稿をあらためたい。